

日本中世英語英文学会 第31回全国大会

プログラム・発表要旨

時：2015年12月5日(土)・6日(日)

所：慶應義塾大学（三田キャンパス）

The 31st Congress
The Japan Society for Medieval English Studies
5-6 December 2015
Keio University (Mita Campus)



日本中世英語英文学会

目 次

会長挨拶	3
会場案内	4
最寄駅までのアクセス	5
最寄駅から会場までのアクセス	6
慶應義塾大学（三田キャンパス）詳細図	7
会場見取り図	8
プログラム	
第1日 12月5日(土)	10
第2日 12月6日(日)	12
Programme	
Saturday 5 December	14
Sunday 6 December	16
発表要旨	
第1日 12月5日(土)	
研究発表Ⅰ	18
研究発表Ⅱ	19
研究発表Ⅲ	21
第2日 12月6日(日)	
研究発表Ⅳ	23
研究発表Ⅴ	24
研究発表Ⅵ	26

11月12日(木) [必着] までに、学会 HP 経由 (推奨)、
あるいは同封の葉書でご出欠をお知らせ下さい。

* 出張証明書が必要な方は、その旨をご記入下さい。

大会準備委員

山本伍紀 (委員長) 白井菜穂子 (副委員長) 小池剛史
平山直樹 堀口和久 三浦あゆみ 和治元義博

開催校委員

松田隆美 (委員長) 辺見葉子 高橋勇
堀田隆一 徳永聡子 井口篤

事務局

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1
慶應義塾大学文学部 徳永聡子研究室内
Tel. 045-566-1195

会長挨拶

会員の皆様

仲秋の候、会員の皆様には、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。すでにご案内のとおり、日本中世英語英文学会第31回全国大会を、来る12月5日、6日(土、日)の両日、慶應義塾大学三田キャンパスにて開催する運びとなりました。ここに大会のプログラムをお送りし、会員の皆様のふるってのご参加をお願い申し上げます。

本年度の大会は、30回の節目の記念大会であった昨年が続いて、学会が新たなスタートを切る大会となります。その意味で、数多くの研究発表の応募があり、両日ともに充実したプログラムとなったことは慶賀すべきことと思います。開催に向けてご尽力いただいた大会準備委員会に感謝いたします。それでは、一人でも多くの会員の皆様にお目にかかれますことを楽しみにしております。

2015年10月吉日

日本中世英語英文学会
会長 松田 隆美

会 場 案 内

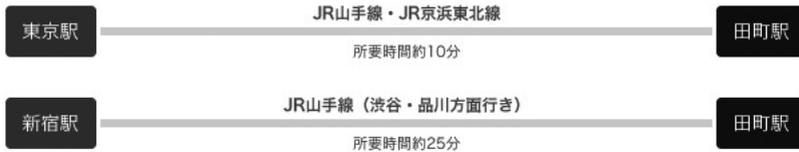
1. 受付は、12月5日(土) 11:30-16:00および6日(日) 9:30-11:30に、西校舎1階517教室前で行います。
2. 当日会員会費は、一般1,000円、学生・定年退職者500円です。
3. ハンドアウトは、各発表会場で配布します。
4. 大会本部は、第1校舎1階102教室です。
5. 会員控室は、西校舎1階515教室です。
6. 司会者・発表者控室は、西校舎1階514教室です。
7. 書店展示は、第1校舎1階101教室および104教室で行われます。
8. ポスターセッションは、12月5日(土) 12:00-13:00および6日(日) 9:00-10:00に、西校舎3階532教室で行います。
9. 懇親会は、12月5日(土) 18:00から生協食堂(西校舎)で行います。会費(一般6,000円、学生3,000円)は、当日受付でお支払い下さい。
10. 車による会場への入場はできません。また、会場内は、指定区域を除き全面禁煙です。
11. 学内の食堂は、日曜日に営業していませんが、周辺には食事のできる店があります。
12. 当学会では宿泊施設の斡旋は行っていません。

連 絡 先

慶應義塾大学 (三田キャンパス)
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
(大会本部：第1校舎1階102教室)
開催校連絡先：松田隆美研究室 03-5427-1193

最寄駅までのアクセス

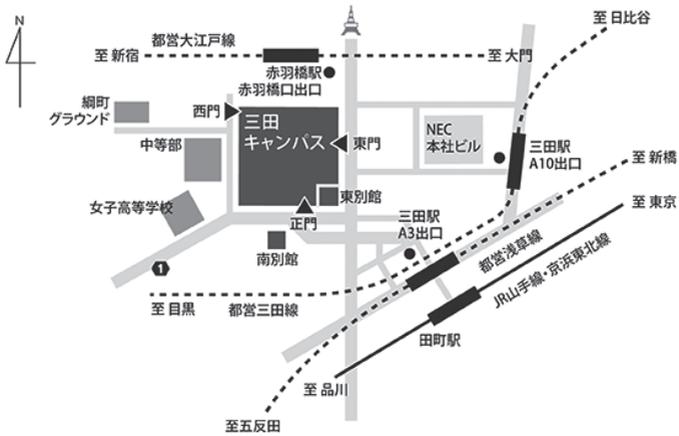
主要駅からのアクセス



空港からのアクセス

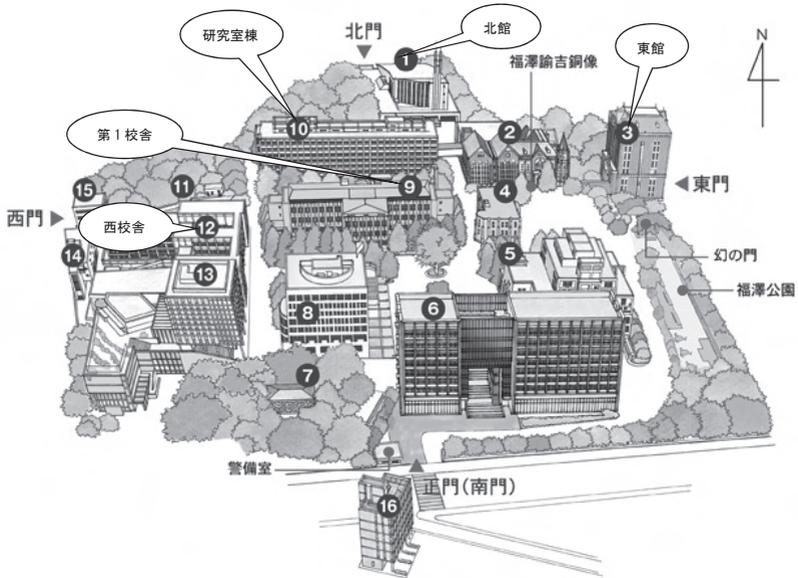


最寄駅から会場までのアクセス



- ・ 田町駅（JR山手線／JR京浜東北線）徒歩8分
- ・ 三田駅（都営地下鉄浅草線／都営地下鉄三田線）徒歩7分
- ・ 赤羽橋駅（都営地下鉄大江戸線）徒歩8分

慶應義塾大学（三田キャンパス）詳細図



- | | |
|----------|---|
| 【1】北館 | 会議室2（編集委員会） |
| 【3】東館 | 4階セミナー室（研究助成セミナー） |
| 【9】第1校舎 | 102（大会本部），101・104（書店展示） |
| 【10】研究室棟 | AB会議室（評議員会，大会準備委員会） |
| 【12】西校舎 | 517（受付，開会式・総会，会長講演，閉会式），
512・513・516（研究発表），532（ポスターセッション），
514（司会者・発表者控室），515（会員控室），生協食堂（懇親会） |

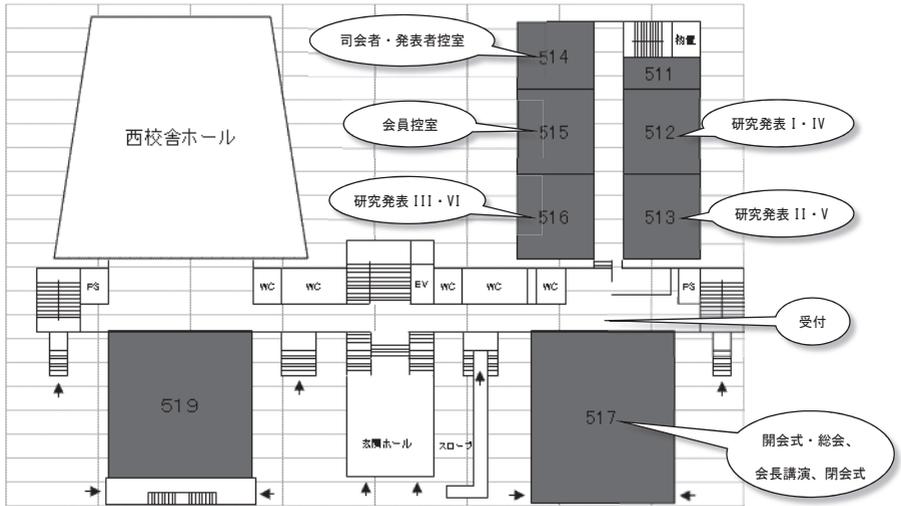
【参照サイト】

三田キャンパス案内

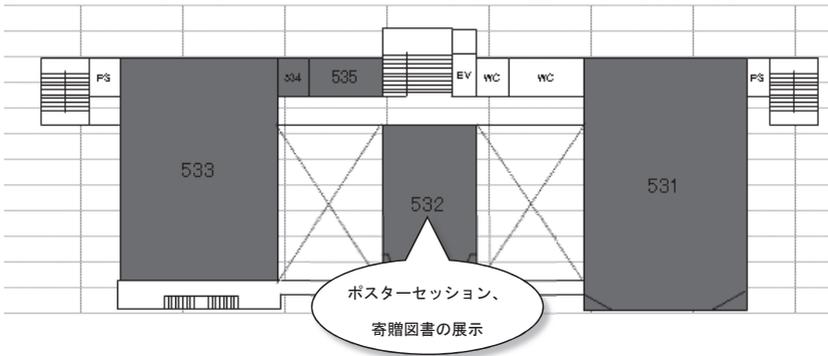
<http://www.keio.ac.jp/ja/access/mita.html>

会場見取り図

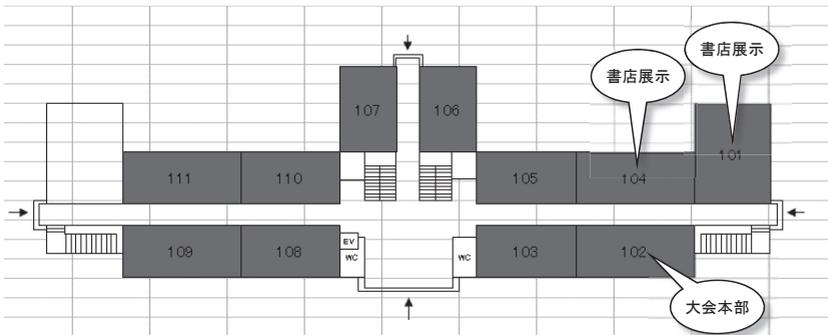
西校舎1階



西校舎3階



第1校舎1階



日本中世英語英文学会 第31回全国大会プログラム

2015年12月5日(土)・6日(日)

慶應義塾大学 (三田キャンパス)

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

(大会本部：第1校舎1階102教室)

開催校連絡先：松田隆美研究室 03-5427-1193

第1日 12月5日(土)

11:30-16:00 受付 (西校舎1階517教室前)

*会員控室 (西校舎1階515教室)

12:00-13:00 ポスターセッション (西校舎3階532教室)

13:00-13:45 開会式・総会 (西校舎1階517教室)

	司会 尾崎久男 (大阪大学)
開会の言葉	会長 松田隆美 (慶應義塾大学)
開催校挨拶	慶應義塾大学文学部長 松浦良充
議事	

事務局報告	事務局長 徳永聡子 (慶應義塾大学)
編集委員会報告	編集委員長 伊藤 壺 (信州大学)
大会準備委員会報告	大会準備委員長 山本伍紀 (杏林大学非常勤講師)
大会案内	開催校委員 堀田隆一 (慶應義塾大学)

13:45-14:45 会長講演 (西校舎1階517教室)

	司会 和田葉子 (関西大学)
暦, 巡礼, corpus mysticum	
	会長 松田隆美 (慶應義塾大学)

15:00-17:20 研究発表 I (西校舎1階512教室)

15:00-15:40 **司会** 尾崎久男 (大阪大学)

1. *The Romaunt of the Rose-A* における動詞 *ginne* の用法について
岩國智子 (広島大学大学院)

15:50-16:30 司会 尾崎久男 (大阪大学)

2. Late OE に見る古英語動詞の形態的統合

小倉美知子 (東京女子大学)

16:40-17:20 司会 田辺春美 (成蹊大学)

3. ラヤモンの『ブルート』における同格表現：肩書と人名の語順の変遷

新川清治 (白鷗大学)

15:00-17:20 研究発表Ⅱ (西校舎1階513教室)

15:00-15:40 司会 佐藤桐子 (大東文化大学)

4. 古英語・中英語における使役・勧誘表現

海田皓介 (千葉大学大学院人文社会科学
科学研究科特別研究員)

15:50-16:30 司会 佐藤桐子 (大東文化大学)

5. 12世紀写本『ケンブリッジ大学図書館蔵古英語版旧約聖書(七書)』に
おける VS 語順から SV 語順への変化について

— 11世紀の他の写本を比較して —

小林茂之 (聖学院大学)

16:40-17:20 司会 家入葉子 (京都大学)

6. 存在文の there の文法化について

藤原保明 (聖徳大学)

15:00-17:20 研究発表Ⅲ (西校舎1階516教室)

15:00-15:40 司会 濱口恵子 (同志社大学非常勤講師)

7. The Wife of Bath's Prologue における中世後期の女性と
リテラシーの表象

濱田里美 (立教大学大学院)

15:50-16:30 司会 濱口恵子 (同志社大学非常勤講師)

8. 「弁護士の話」の語りにおけるローマとイングランド

杉山ゆき (慶應義塾大学大学院)

16:40-17:20 司会 海老久人 (神戸女子大学)

9. チョーサーの巡礼の一側面 —『ボエース』との繋がりから—

本田崇洋 (福島工業高等専門学校)

18:00-20:00 懇親会 (西校舎 生協食堂)

第2日 12月6日(日)

9:00-10:00 ポスターセッション (西校舎3階532教室)

9:30-11:30 受付 (西校舎1階517教室前)

*会員控室 (西校舎1階515教室)

10:00-12:20 研究発表Ⅳ (西校舎1階512教室)

10:00-10:40 司会 田口まゆみ (大阪産業大学)

10. 海の向こうのもう一人の女 —*South English Legendaries*

「聖ミルドレッド伝」に見るミソジニーとゼノフォビア —

菅野磨美 (PhD Candidate, King's
College London)

10:50-11:30 司会 唐澤一友 (駒澤大学)

11. *Lives of Saints* における Ælfric のヴァイキングに対する態度

— English saints の説話を中心に —

和田忍 (首都大学東京非常勤講師)

11:40-12:20 司会 唐澤一友 (駒澤大学)

12. OE *gif* の「改宗」—ゲルマン人の「おもてなし」から神の恵みへ—

織田哲司 (東京理科大学)

10:00-12:20 研究発表Ⅴ (西校舎1階513教室)

10:00-10:40 司会 小川浩 (昭和女子大学非常勤講師)

13. *Ancrene Wisse* 以前の conscience 概念: *Catholic Homilies I, II, Blickling Homilies* における vernacular-noun

井野崎千代子 (大阪産業大学
非常勤講師)

10:50-11:30 司会 西村秀夫 (三重大学)

14. 14・15世紀における貿易と商業の英語語彙について

石小軍 (对外経済貿易大学)

11:40-12:20 司会 西村秀夫 (三重大学)

15. Metonymy or Meronymy? 同意語的でない

ワードペアについての再考察

青木繁博 (新潟青陵大学短期大学部)

10:00-12:20 研究発表VI (西校舎1階516教室)

10:00-10:40 司会 壬生正博 (福岡歯科大学)

16. *Pearl* における宝石商の天国への軌跡 — 凡庸な生にこそある希望 —

渡辺直子 (関東学院大学非常勤講師)

10:50-11:30 司会 石井美樹子 (神奈川大学名誉教授)

17. 中世ロマンスにおけるエクフラシス

— 読まれる女性, 絵画化される声 —

小川真理 (明治大学非常勤講師)

11:40-12:20 司会 高木眞佐子 (杏林大学)

18. Eugène Vinaver の Oxford 時代

— *The Works of Sir Thomas Malory* (1947) 出版への道 —

高宮利行 (慶應義塾大学名誉教授)

12:25-12:40 閉会式 (西校舎1階517教室)

閉会の言葉

副会長 地村彰之 (広島大学)

SUNDAY 6 DECEMBER

9:00-10:00 **Poster Session** (Room 532, West School Bldg)

9:30-11:30 **Registration** (Room 517, West School Bldg)

*Members' Tea Room (Room 515, West School Bldg)

10:00-12:20 **Paper Session IV** (Room 512, West School Bldg)

10:00-10:40 Presider: TAGUCHI, Mayumi, *Osaka Sangyo University*

10. The Other Woman beyond the Sea: Misogyny and Xenophobia in 'The Life of Saint Mildred' in the *South English Legendaries*

KANNO, Mami, *PhD Candidate, King's College London*

10:50-11:30 Presider: KARASAWA, Kazutomo, *Komazawa University*

11. Ælfric's Attitude to the Vikings in *Lives of Saints*: With Special Reference to His Homilies of English Saints

WADA, Shinobu, *Tokyo Metropolitan University*

11:40-12:20 Presider: KARASAWA, Kazutomo, *Komazawa University*

12. The Conversion of OE *gif*: From Treasure-Giving to God's Grace

ODA, Tetsuji, *Tokyo University of Science*

10:00-12:20 **Paper Session V** (Room 513, West School Bldg)

10:00-10:40 Presider: OGAWA, Hiroshi, *Showa Women's University*

13. An Examination of Nouns for Conscience-Expression before *Ancrene Wisse: Catholic Homilies I, II, and Blickling Homilies*

INOSAKI, Chiyoko, *Osaka Sangyo University*

10:50-11:30 Presider: NISHIMURA, Hideo, *Mie University*

14. English Vocabulary of Trade and Commerce in the 14th and 15th Century

SEKI, Shogun, *University of International Business and Economics*

11:40-12:20 Presider: NISHIMURA, Hideo, *Mie University*

15. Metonymy or Meronymy? Non-Synonymous Word Pairs Revisited

AOKI, Shigehiro, *Niigata Seiryō University Junior College*

10:00-12:20 Paper Session VI (Room 516, West School Bldg)

10:00-10:40 Presider: MIBU, Masahiro, *Fukuoka Dental College*

16. Jeweler's Path to Heaven in *Pearl*: Hope in His Mediocre Life
WATANABE, Naoko, *Kanto Gakuin University*

10:50-11:30 Presider: ISHII, Mikiko,

Professor Emeritus, Kanagawa University

17. Ekphrasis in Medieval Romance: Interpretation of Female Characters
and Their Pictorialized Voice

OGAWA, Mari, *Meiji University*

11:40-12:20 Presider: TAKAGI, Masako, *Kyorin University*

18. Eugène Vinaver in Oxford: A Passage towards the Publication of *The Works of Sir Thomas Malory* (1947)

TAKAMIYA, Toshiyuki, *Professor Emeritus, Keio University*

12:25-12:40 Closing Address (Room 517, West School Bldg)

JIMURA, Akiyuki

Vice-President of JSMES, *Hiroshima University*

発表要旨

第1日 12月5日(土)

15:00-17:20 研究発表 I (西校舎 1 階512教室)

15:00-15:40 司会 尾崎久男 (大阪大学)

1. *The Romaunt of the Rose-A* における動詞 *ginne* の用法について

岩國智子 (広島大学大学院)

中英語で特徴的な動詞 *ginne* は、チョーサーの作品の中でも度々使われており、*begin* の意味を含み、助動詞として用いられることもある。現在形では「現在を示すマーカー」として、過去形 (*gan*) では「過去のマーカー」として使われることも多い。また、韻文では韻律を整えるために使用されることも多い。*ginne* が起動相として捉えられるか否かもよく論じられる。このような *ginne* に対応する古フランス語の動詞はない。Benson 版のチョーサー『薔薇物語』Fragment A の中で *ginne* は *gan* の形で、21回使用されている。この箇所の古フランス語原典に対応する箇所を Lecoy 版で見っていくと、チョーサーが単なる韻律を整えるために *gan* を使用したのではなく、過去のマーカーとして、物語に臨場感を与えるために脚色して用いた可能性が考えられる。動詞 *ginne* の使用箇所と、古フランス語原典の対応箇所との比較はこれまでなされていない。本発表ではこの比較を Fragment A について行う。チョーサー的 *ginne* の用法を、古フランス語原典と比較することで、新たな知見を得ることを目指す。

15:50-16:30 司会 尾崎久男 (大阪大学)

2. Late OE に見る古英語動詞の形態的統合

小倉美知子 (東京女子大学)

Late Old English から Early Middle English にかけて、古英語動詞が様々な原因により統合される。意味と音との類似により統合されるもの (*laeran* と *leornian*, *blissian* と *bletsian*)、構文の相違が dative-accusative syncretism と前辞の消失により統合されるもの (*wendan* と *gewendan*)、語幹母音の長短の相違と前辞のあるなしの区別が曖昧になり形態的に同形を生むことになったもの (*witan*, *witan*, *gewitan*)、不定形ではなく過去分詞形から統合されたと思わ

れるもの (-*biddan* と -*beodan*, *þyncan* と *þencan*) など、音と形態との類似に意味の類似を伴う場合と、意味は違うが統合されたことで消失した動詞が別の類義動詞に置き換えられていく場合とがある。

類義語間の葛藤からの語彙変化と統語的变化をもとに、*cweðan*, *secgan*, *tellan* の意味・機能領域の通時の変遷などを扱ってきたが、今回の発表では、意味・機能における rivalry と共に、音・形態の類似性による動詞間の統合 (merger) が特に後期古英語と初期中英語の間の時期に起り、古英語動詞の自然淘汰が行われていた様子を報告、古英語と中英語の continuity のより正確な記述を目指す。

16:40-17:20 司会 田辺春美 (成蹊大学)

3. ラヤモンの『ブルート』における同格表現: 肩書と人名の語順の変遷

新川清治 (白鷗大学)

古英語において同格表現における肩書と人名の配置で好まれたものは *Alfred King, the King Alfred, Alfred the King* であったが、稀にしか見られなかった *King Alfred* の形が現代英語では主流になっている。本発表では初期中英語韻文詩ラヤモンの『ブルート』の言語的性格が大きく異なる2つの写本において *king* を肩書とする同格表現を比較、分析し、上記の変遷がどのように生じたかを考察する。その際、*Athelwulfing* (son of Athelwulf) のようなさらなる同格要素、*Great* のような形容詞や *of Wessex* のような前置詞句による修飾語句がその語順に与える影響に関しても検討する。結論として、肩書と人名の語順の変遷には同格のみでなく、同格表現の複合名詞化や同格要素の叙述名詞的性格が関係していることを明らかにする。

15:00-17:20 研究発表Ⅱ (西校舎1階513教室)

15:00-15:40 司会 佐藤桐子 (大東文化大学)

4. 古英語・中英語における使役・勧誘表現

海田皓介 (千葉大学大学院人文社会科学研究所特別研究員)

英語のモダリティ表現の一要素として、使役表現には (i) 許可表現 (e.g. *He let her go*) と (ii) 義務表現 (e.g. *He made her go*) がある。これらは (iii) 勧誘表現 (e.g. *Let's go*) と関連が深い。現代英語 *let* (古英語 *lætan*, 中英語 *leten*)

は (i) と (iii) に用いられ, (ii) は *make* (同 *macian, maken*) が担う。一方 *laetan, leten* は (ii) にも用いられる。(iii) は古英語 *uton* (本動詞 *gewitan* ‘to go’ に由来し, 初期中英語にて廃用となる) や一般の動詞の接続法形により表される。従来の研究ではこれらの使役・勧誘両表現を総括的に議論したものが少ない。そこで, 本研究は, 両表現の関連を体系的に考察する。*The Blickling Homilies*, *Ælfric’s Catholic Homilies*, *Lazamon’s Brut* 等の宗教散文や詩を用い, 分析に際して (1) 語彙論的視点: 上記各動詞の意味の競合・(2) 語用論的視点: 文脈上の参与者間の関係・(3) 統語論的視点: 勧誘表現の定動詞第一位語順といった観点から分析を行う。本研究は, 従来法助動詞などが主な対象であったモダリティ研究に, 別の観点からの研究成果を提供する。

15:50-16:30 司会 佐藤桐子 (大東文化大学)

5. 12世紀写本『ケンブリッジ大学図書館蔵古英語版旧約聖書(七書)』における VS 語順から SV 語順への変化について — 11世紀の他の写本を比較して —

小林茂之 (聖学院大学)

本発表では、『古英語版旧約聖書(七書)』の写本の一つであるケンブリッジ大学図書館蔵の写本 (MS. Cambridge University Library, Ii, 1. 33) を取り上げ, 主に VS 語順から SV 語順への変化について取り上げる。この写本の書写年代は, ちょうど古英語から中英語への過渡期に当たる12世紀であるので, ノルマン人による征服後に起きた急激な英語の変化を反映している。このC写本は, B写本やL写本と比較して, アルフリッチ (*Ælfric*) が原本を書いた時代より1世紀ほど降る古英語から中英語に変わる初期中英語の時代に書写されており, 後期古英語から初期中英語へかけての語彙などについても変化がみられる。中でも, VS 語順から SV 語順への変化は, 英語の基本語順が V2語順から SVO 語順へ変化したことにつながる変化として重要である。

16:40-17:20 司会 家入葉子 (京都大学)

6. 存在文の *there* の文法化について

藤原保明 (聖徳大学)

現代英語の存在文は一般に「*there* + 動詞 + 主語」という構文で表され, *there* は虚辞であることから, (1a) のように場所を示す *there* と同じ文中で共起し, また, (1b) のように *let* の目的語 (または補文 *be light* の文法上の主語)

となることもある。

- (1) a. 'Well,' Mr Gilmore went on, '*there* are no problems *there* either.'
(Lewis, *The Woman in White*)
b. And God said, Let *there* be light; and *there* was light. (Genesis, i.3)

虚辞の *there* は場所の副詞から発達したが、中英語の存在文の *there* はたいていの場合、場所の副詞(句)と照応、虚辞とは断定できない。事実、『ウィクリフの聖書』(1395年頃)では虚辞の *there* は全く確認できず、同じ頃の『マンデヴィル旅行記』では虚辞の *there* の例はまれである。一方、初期近代英語期の『カヴァーデール聖書』(1535)では場所を示さない(1b)のような *there* が生じる。それゆえ、虚辞の *there* は1395年頃～1535年の間に確立したとみなせる。ところが、『パストン家文書』では、(2a)のように同一文中で2種類の *there* が共起し、また、(1b)の最初の *there* と同様の例(=2b)が1471年の書簡に生じることから、15世紀の前半には *there* 構文が確立し、*there* の文法化が完了したと言える。

- (2) a. for *ther* is gret dyvysyen be twyx the Lordys and the schypmen *ther*.
(1462年)
b. let *ther* be but fewe woordys of thys perdon. (1471年)

15:00-17:20 研究発表Ⅲ (西校舎1階516教室)

15:00-15:40 司会 濱口恵子 (同志社大学非常勤講師)

7. The Wife of Bath's Prologue における中世後期の女性とリテラシーの表象

濱田里美 (立教大学大学院)

『カンタベリー物語』において、the Wife of Bath は数少ない女性巡礼者でありながら、物語の中心人物の一人として描かれている。The Wife の特徴として「総序の歌」で語り手が真っ先に言及するのは、彼女が“somdel deef” (GP 446)、つまり耳が悪いという点であるが、その原因となった事件は、彼女の自伝的プロローグの重要なエピソードの一つであると言えるだろう。

そこで、本発表では、The Wife of Bath's Prologue で語られる夫婦の関係性、特に5番目の夫 Jankyn との諍いの場面を、中世後期のリテラシーという観点から考察する。男性主導であった「書く」という文化において、歪められ、あ

るいは理想化された女性たちの姿からは、当時の女性のリテラシーについて検証することは困難であると指摘されているが、書物という“auctoritee”の介入が the Wife にもたらした変化は、中世後期の文化的変遷を知る上で重要な表象であると結論づける。

15:50-16:30 司会 濱口恵子（同志社大学非常勤講師）

8. 「弁護士の話」の語りにおけるローマとイングランド

杉山ゆき（慶應義塾大学大学院）

本発表は、マッパムンディに描かれた世界観に依拠しつつ、まず『黄金伝説』に収められた「聖ウルスラ伝」と中英語ロマンス『ローマの善女フロレンス』を取り上げ、中世キリスト教圏の地理的・政治的中心として絶大な権威を誇ったローマが有した役割を指摘する。その後、『カンタベリー物語』の「弁護士の話」を扱い、材源と考えられるガワーの『恋する男の告解』とトリベットの『年代記』の記述と比較しつつ、弁護士がローマ皇帝の娘クスタンスの放浪をいかに語るかを分析する。弁護士は、ローマの宗教的権威に依存しつつもその支配権のイングランドへの浸透は阻止し、自らが支配の一翼を担う故郷イングランドのアイデンティティの基盤を地理的周縁性に求めるのである。一連の分析から、本発表はクスタンスの放浪の語られ方を再考し、「弁護士の話」が中心としてのローマと対照させてイングランドの辺境性を認識することで、その文化的特性を自己定義しようとした作品として解釈可能なことを示す。

16:40-17:20 司会 海老久人（神戸女子大学）

9. チョーサーの巡礼の一側面

—『ボエース』との繋がりから—

本田崇洋（福島工業高等専門学校）

チョーサーは『哲学の慰め』を全訳し、ボエティアン・バラッドを創作するなど、ボエティウスに対する関心の深い一面がある。その関心の深さは、「ジェネラル・プロローグ」（以下G.P.）の冒頭と『カンタベリー物語』の全体構造にも象徴的に現れる。『哲学の慰め』には、ボエティウスが「哲学」との議論を通して、悲しみを克服し、彼の精神が真理を知るわけであるが、同時にそこには、地上の世界の煩わしさから逃れ、天上の世界へ目を向けるプロセスを見ることができ、いわば、人間の魂が天に目を向ける精神の旅と考えることができる。

チョーサーの巡礼の過程とその本質がいかなるものかを『哲学の慰め』と

G.P.との繋がり、また、一見すると物見遊山の雰囲気をもつ『カンタベリー物語』が、実質的には、魂の救済を求める「巡礼」であり、それは天上へ向かうボエティウスの精神の旅と重ね合う部分であることを明らかにする。

第2日 12月6日(日)

10:00-12:20 研究発表IV (西校舎1階512教室)

10:00-10:40 司会 田口まゆみ (大阪産業大学)

10. 海の向こうのもう一人の女 — *South English Legendaries* 「聖ミルドレッド伝」に見るミソジニーとゼノフォビア —

菅野磨美 (PhD Candidate, King's College London)

イングランドの聖人を多く収めた中英語聖人伝 *South English Legendaries* (*SELS*) では、自国イングランドの表象とともに、対になる形で異国が描かれることがある。*SELS* の14~15世紀の写本に収められた7世紀ミンスター・イン・サネット大修道院の聖女「ミルドレッド伝」は、聖女が修道院長を務めたイングランドの女子修道院と、聖女が幼い頃に学んだフランスのシェル修道院を対照的に描いている。特に「海の向こうのもう一人 (*'be oþer biþende see'*)」と記されるシェルの女子修道院長は悪の存在として表象され、聖人伝では聖人に身体的暴力を加える極めて珍しい女性の例である。本発表では「ミルドレッド伝」に提示されるイングランドと異国としてのフランスの二項対立を例に、*SELS* の特徴としてしばしば指摘される反ノルマン／フランス主義を再考する。「ミルドレッド伝」では、異国を恐れ嫌悪するゼノフォビアが、シェルの女子修道院長の表象に見られる女性嫌悪 (ミソジニー) に反映されていると論じる。

10:50-11:30 司会 唐澤一友 (駒澤大学)

11. *Lives of Saints* における Ælfric のヴァイキングに対する 態度 — English saints の説話を中心に —

和田忍 (首都大学東京非常勤講師)

Lives of Saints (以下 *LS*) には、Æthelthryth, Swithun, Oswald, Edmund という4人のイングランド土着の聖人の説話が含まれている。Ælfric がこれらの聖人を採用した理由は、イングランド人になじみの深い聖人の伝説を通じて、彼らのキリスト教への崇拜意識を高めるためとも考えられている。また、これ

らの説教にはイングランド人にキリスト教への厚い信仰を求めながら、ヴァイキングに関する内容といった当時のイングランドの状況を示す内容も含まれている。Godden (1994) は *LS* 以前に作成された *Catholic Homilies* よりも *LS* の方がヴァイキングの影響を強く受けた内容になっていると述べている。そこで、本発表では、イングランド土着の聖人の説話において Ælfric はヴァイキングに対してどのような意識を示しているのかを考察し、彼の説教における異教徒としてのヴァイキングの扱いについて論じてみたい。

11:40-12:20 司会 唐澤一友 (駒澤大学)

12. *OE gif* の「改宗」—ゲルマン人の「おもてなし」から神の恵みへ—

織田哲司 (東京理科大学)

折口信夫の「古代研究」のアナロジーを用いて古代ゲルマン人の精神世界を再考する。とくに神と民の間の *gift* をめぐるインタラクティブなやりとりのファシリテータとしての王の役割を概観し、そこから C. L. Wrenn が “this is one of the greater unsolved cruces of the poem” と呼んだ *Beowulf* 168行に現れる *gifstol* の意味を導き出し、そしてできればキリスト教布教政策と関連して製作されたかもしれないエレジー諸作品に用いられている *ubi sunt* モチーフの意味などについても言及したい。

10:00-12:20 研究発表V (西校舎1階513教室)

10:00-10:40 司会 小川浩 (昭和女子大学非常勤講師)

13. *Ancrene Wisse* 以前の *conscience* 概念: *Catholic Homilies I, II, Blickling Homilies* における *vernacular-noun*

井野崎千代子 (大阪産業大学非常勤講師)

Ancrene Wisse (AW), Corpus MS 83a において英語 *conscience* が初出したとされ (*MED*), *vernacular* の *inwit* にグロスされている。現存する最古の *Cleopatra MS* には Scribe A によって他の *vernacular* が使われている形跡があるが、Scribe B がこれらを *inwit* に修正しており、Dobson はこれを「正しい誤修正」とする。しかし Millett による全写本照合エディションが他写本での複数の語彙使用を炙り出し、Scribe B の修正を再考する可能性を与えた。*AW* 以前の *conscience* 概念の *vernacular* 表現を調べるべく、まず *Catholic*

Homilies I, II (CH I, II) と *Blickling Homilies (BH)* を対象とし該当言語を抽出した。第31回西支部例会では *CH I* に関する発表を行ったが、本大会では *CH I* と対象や目的が異なるとされる *CH II* においてどのような表現の差異が見られるのか、また両作品に使用される *AW* には出てこない表現の使用状況などを *BH* で見られるものと比較しながら提示してみたい。

10:50-11:30 司会 西村秀夫 (三重大学)

14. 14・15世紀における貿易と商業の英語語彙について

石小軍 (対外経済貿易大学)

This research focuses on the nouns of various aspects of trade and commerce in the 14th and 15th century England. On the one hand, mainly from the highest semantic level entry of *Trade and commerce* and its further subcategories in *HTOED*, and some other relevant materials in the on-line *OED* and *MED*, the author surveys all the synonyms, attempting to give a clear picture about their origin, time, lexical suppression, and semantic development; on the other, the author continues to observe carefully the 14th-15th century part of Custom Rolls kept in the Public Record Office, Corporation of London Records Office, and British Library. Here, these are accounts of commodities entering British ports, including both long lists of goods (a series of disconnected noun phrases) and the larger syntactic units, providing further possibilities to explore their frequencies and concrete pragmatic functions hard to grasp from the lexemes of dictionaries. At the present stage, the author ventures to hypothesize that at least the original English words of this semantic field consistently attained huge proportions both in the medieval mixed business contents and the relatively monolingual ME records, although Latin was a dominant language then in Britain. (※ 発表での使用言語は日本語。)

11:40-12:20 司会 西村秀夫 (三重大学)

15. Metonymy or Meronymy? 同意語的でないワードペアについての再考察

青木繁博 (新潟青陵大学短期大学部)

Koskenniemi (1975) は、*The Book of Margery Kempe* に見られるワードペ

アを、主にその構成要素である2語の意味関係に基づいて3通りに分類している：1. Synonymous or nearly-synonymous, 2. Metonymic, 3. Complementary or antonymous。ここに含まれる Metonymic あるいはメトニミーは、本来ならば対置されるべきはメタファーやシネクドキ等の修辞学的な用語であり、これが Synonymous 等の意味論的な項と同列になっている点は、ある種の混同が見られるとも取れる。しかしながら、*Margery* で用いられた同意語的でないワードペアの用例を詳細に分析してみると、おそらく Koskenniemi の意図としては、決して一様でないワードペア全般における語同士の意味関係の複雑さ、ワードペア自体が意味変化・意味拡張する可能性、さらには新質なワードペアが生まれる際に働くであろうプロセスなど、ワードペアそのものが持つ多様な局面を示そうとしたのではないかと考えられる。本発表では、出発点としては Koskenniemi (1975) や Stone 等の *Margery* のワードペアを直接に扱った先行研究を参照しつつ、そこに近年の認知言語学的な観点も加え、改めて中英語ワードペアの意味について考察したい。

10:00-12:20 研究発表VI (西校舎1階516教室)

10:00-10:40 司会 壬生正博 (福岡歯科大学)

16. *Pearl* における宝石商の天国への軌跡 — 凡庸な生にこそある希望 —

渡辺直子 (関東学院大学非常勤講師)

本発表の目的は *Pearl* において主人公宝石商が、なぜ彼の娘 Pearl によって天国へ導かれたのかを明らかにすることである。中世 *Pearl* 以外の異界を描いた作品は、聖人が主人公を導き、主人公が修道士か悪人かのどちらかである。しかし、宝石商はごく平凡な人物であり、娘によって天国へ導かれる。

Pearl では天国の風景は光や芳香といった五感に訴える形で表現され、宝石商の言葉は非常にわかりやすい。詩人は「天国が霊的精神的に地上とは次元が異なる世界である」という本質を悟り、地上の風景の光の強度を上げ、芳香の香しさを強調することで凡庸さの中で天国の崇高さを表現した。

このような首尾一貫した作品イメージのため、主人公自身も平凡な人物で大聖人や哲人ではなく自身の娘に導かれて天国に赴く必要があった。最終的には娘の口を通して神の深い愛が語られる。娘は「宝石商の娘」でもあり、「天国の人」でもある。詩人は凡庸さを堅持しつつ天国の核である神の愛をはっきりと伝えている。

10:50-11:30 司会 石井美樹子（神奈川大学名誉教授）

17. 中世ロマンスにおけるエクフラシス — 読まれる女性、 絵画化される声 —

小川真理（明治大学非常勤講師）

エクフラシスの伝統はホメロスの『イリアス』におけるアキレウスの盾の描写に端を発すると言われる。『イリアス』の例は戦いの英雄に関連して男性的な文脈をもつが、エクフラシスが女性登場人物と結びつくとき、彼女たちを動かしたり、あるいは受動的で自ら語る声を持たない傾向のある女性たちが自分の思い等を伝える役割を果たしたりすることがある。

ギリシア神話にも絵柄を織ることによって失った声を獲得するピロメラの挿話があり、また中世ロマンスでは芸術品の鑑賞と解釈に伴い女性が動かされる例として、物語が描かれた布を纏った Emaré (*Emaré*)、物語が刻まれた金杯を代金として売り払われた Blanche flour (*Floris and Blanche flour*)、男性主人公の絵画鑑賞後運命が流転する Hysmine (*Hysmine and Hysminias*) などが挙げられる。

いずれも女性が自ら語ること、自発的に行動を起こすことにかわるものであるという点で、作品中の女性たちの受動性や沈黙を補完する大きな役割を担っていると言えるのである。

11:40-12:20 司会 高木眞佐子（杏林大学）

18. Eugène Vinaver の Oxford 時代 — *The Works of Sir Thomas Malory* (1947) 出版への道 —

高宮利行（慶應義塾大学名誉教授）

1934年に発見された Winchester 写本を基に編纂された *The Works of Sir Thomas Malory* は、出版までに第2次世界大戦を挟んで13年間を要した。しかしながら、本発表では、編者 Eugène Vinaver の Malory 研究の萌芽が、1919年の Lincoln College, Oxford 登録時から芽生えていたことを示唆したい。国際アーサー王学会、BBSIA, *Medium Aevum*, *French Studies* といった、今も続く学会や論文雑誌を創出した Vinaver の、中世研究のバイオニアと言える功績はきわめて大きい。1933年以降30年にわたって教鞭をとった University of Manchester の教え子たちは、Vinaver の中世研究に Lincoln College の学生時代を含めない傾向があるが、これが伝記的にも誤謬であることを実証したいと考える。

Winchester 写本の発見者, Walter F. Oakeshott の優れた伝記が1995年に出版された。同様に伝記的な研究がふさわしい Vinaver に関しては, 情報が錯綜し, 矛盾する場合も多い。

今回 Vinaver の足跡を調査するために用いた資料は, Lincoln College Archive, Bodleian Libraries の University Archive, そして Oxford University Press の Archive などである。*The Works of Sir Thomas Malory* の20世紀における出版史的な価値は高いが, 同時に取り組むべきは稀有な中世アーサー王研究者 Vinaver の伝記的な跡づけであろう。

